

ているが、この表によると正保（1644～）の頃に大規模な新田開発が進んだことが分る。特に新川地方（とりわけ黒部川扇状地）の新田は最も多かった。貞享2年（1685）の頃から黒部川の川筋が現在のあたりに固定し、その辺りに大きな洪水被害が出るようになり、莫大な引高が生じた。近世以降、黒部川の川筋は川除（霞堤）の築造によるものであった。

藩政時代、扇状地を流れ下る黒部四十八か瀬は親不知と共に陸上交通の難所であった。愛本橋を渡り浦山・舟見を通る道を上往来（増水期、夏街道5里13町）、海岸近く入善を通る道を下往来（減水期・積雪期、冬街道3里45町）とよぼれた。

酷しい地理的条件のために開発の進まなかった黒部奥山も、科学技術の進歩と共に開発の端緒は先ず電源開発で始まり、第二次世界大戦後は観光開発が進み、電源開発資材運搬用の専用軌道は黒部峡谷探勝のトロッコ電車に変わり、温泉利用客も増えた。昭和46年、立山黒部アルペンルートが開通し、富山・大町間はロープウェーやトロリーバスなど8種類の交通機関を利用して5時間で北アルプスを横断できるようになり、1999年には106万余の登山・観光客の入り込みをみるようになった。しかし、昭和10年頃、後立山や下の廊下を筆者自ら跋涉し、秋の空の色のような黒部本流の水の色に感動したことを想起するとともに、今は緑色に変わり、かつての色は支谷にのみその名残りを留めて居るのをみると、黒部溪谷の開拓者であり紹介者である故冠松次郎やこの書の著者と共に心から惜しまざるをえない気持ちになる。

（中田栄一）

岩崎公弥著：『近世東海綿作地域の研究』

大明堂、1997年1月

A4判 290ページ 本体3,605円

著者は長年にわたって、三河国や尾張国などを中心とした東海地域を研究対象地域とし、綿作を研究事例とした歴史地理学的視角からの研究成果を多数蓄積してきた。本書は、その研究成果の集大成の一端として、かつ1997年10月に広島大学から授与された博士（文学）論文に基づき公刊されたものである。歴史地理学における研究成果が単著として世に出されることは、歴史地理学の学界のみならず、歴史学や経済史学などの関連する学界に対しても極めて有意義であり、歴史地理学界の底上げにも大いに寄与するものである。

さて、本書は次のような内容から成る9つの章で構成されている。

第一章 序論

第二章 近世綿作研究に関する既往研究の成果と動向

第三章 本研究の意義と特色

第四章 明治初期における東海地域の農業生産と綿作の地位

第五章 東海綿作地域の自然的・人文的概観

第六章 東海地域における近世綿作の概観

第七章 三河・尾張および伊勢地域における綿作の地域的特色

I 西三河地域における近世綿作

II 尾張地域における近世綿作

III 伊勢地域における近世綿作

IV 三河・尾張および伊勢地域における近世綿作

第八章 三河および尾張地域における木綿流通の地域的展開

I 西三河地域における木綿流通の地域的展開

II 尾張地域における諸産業と木綿流通の地域的展開

III 三河および尾張地域における木綿流通の地域比較

第九章 結論

次に、各章の内容を紹介しつつ、評者の若干の寸評を加えることとする。

第一章では、本書の研究目的・研究視角・研究の枠組みに関して、明確に論述されている。

研究目的としては、江戸時代の東海地域における綿作の地域的展開や綿作関係の商品流通の地域特色を、自然環境及び地理的・社会経済的状況などから解明することとしている。また、その解明の手段として、①自然的条件及び綿作の地域的類型や農業生産力などの地域的特色、②東海地域内の個々の地域及び全国における位置づけ、③商品流通に関する地域的展開、④商品流通と政治支配や幕藩制市場構造との関連といった、4つの研究視角を提示している。そして最後に研究の枠組みとして、各章の論旨の展開を簡潔に明記している。

第二章では、研究事例とする綿作の研究上での重要性を指摘した上で、殊に1950年以降における綿作研究では、地主制研究、生産力・農業技術的側面、立地論の3つに分類し、研究動向を整理している。さらに、残された研究課題として、①畿

内綿作の研究成果と他地域との比較、②各綿作地域における農法及び生産力的側面の解明、③各地域における綿作の発展・衰退の究明、④農業体系の中での綿作の把握、の4点を指摘している。

先行研究における研究動向の把握は、多くの場合にはその研究対象とする研究事象を中心に整理されがちである。とりわけ、その研究蓄積が多い綿作に関する研究にあつては、多くの研究時間を割かれることになろう。しかし、著者があとがきで「毎週『地域論』をテーマとした勉強会を行った」と述べているように、本研究のいわゆる本質理論は地域論に立脚していると思われ、歴史地理学における地域論の研究動向に関して、何らかの形で触れても良かったのではなからうか。

さて、第一章と第二章における研究視角の提示と研究史の整理を踏まえ、第三章では研究の意義と特色を述べている。本研究の特色としては、①東海地域の綿作を他地域と比較しつつ究明すること、②商品生産のあり方を空間的（面的）な広がり意識して追求すること、③地域固有の条件との関わりに重点をおくこと、そして④地域スケールを郡域から旧国域を基本とすること、の4つの点があげられている。これらの特色は、地理学ないしは歴史地理学の本質的な研究視角であり、歴史学の研究視角との相異を意識したものと考えられる。

第四章以降は、具体的な調査に基づく研究成果である。

第四章では、『全国農産表』を資料として、研究対象地域である東海地域の綿作に関する全国的な位置を把握している。

第五章においては、東海地域の自然的条件を全国的な中で位置づけるとともに、西三河及び尾張地域の綿作について主として自然条件から検討している。そして、洪積台地の畑地開発や干拓地の新田開発との関連を明らかにし、両地域の政治的支配との関連に関しても言及している。

次の第六章では、東海地域、殊に三河地域・尾張北西部・知多地域・伊勢地域の綿作を概観している。

第七章では、西三河地域・尾張地域・伊勢地域の綿作を具体的な現地調査に基づく資料により、詳細に検討している。西三河地域については、田方綿作・自然堤防地帯の畑方綿作・洪積台地上の畑方綿作・海岸部の新田砂畑綿作の4つに地域類型を行っている。さらに綿作経営に関しても、稲

綿輪換綿作・綿と雑穀との輪作・連年綿作の3つの類型が存在したことを明らかにしている。また生産性も、摂津や河内地域とほぼ同程度であったとしている。

次に尾張地域に関して言及し、自然堤防地帯での綿作の卓越、畿内地域と同等の経営規模、尾張北部地域における綿織物業地帯と綿作地帯との地域的分化などの諸点を明確にしている。

最後に伊勢地域の綿作について検討し、中部から南部地域の自然堤防上での綿作の卓越していたこと、尾西地域や西三河地域と同程度の経営規模であったこと、干鰯の投入があるものの収量は畿内地域の収量以下であることなどを明らかにしている。

第八章においては、三河及び尾張地域の木綿流通の地域的特色を検討している。三河地域の木綿流通においては、所領錯綜地域であるがために江戸の木綿問屋の支配が浸透していたことを踏まえ、木綿流通の担い手が仲買商・買次問屋・積問屋の三者からなり、買次問屋が中核的役割を果たしていたことを究明している。さらに、これらの商人の地域的分布を検討し、街道や河口など交通の利便性との関連について言及している。

尾張地域の木綿流通については、当該地域が一円支配地域であったことを踏まえつつ、地方的特産品としての性格、領国内の諸市場における取り引き、定期市との関連、知多半島地域の特異性、木綿種の地域的差異の諸点から言及している。

そして、最後の第九章では、以上の各章で明らかになった諸点のまとめとなっている。

以上のように、本書は詳細な現地調査に基づく重厚な研究成果である。しかし、伊勢地域における木綿流通に関しても検討がなされていれば、なお一層3つの地域比較が明瞭になったと考えられる。

（古田悦造）

松田松男著：

『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』

古今書院 1999年2月

A5版 316ページ 本体9,200円

本書は、戦後農村の変貌について、高度経済成長期における労働市場の変貌、とりわけ酒造出稼ぎに焦点をおいて研究を進めてこられた著者の近著である。一方で、わが国の伝統工業である酒造業に対してその労働力のあり方からの研究ともい